
Crystal Story 中編

ハルシオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C r y s t a l S t o r y 中編

【Nコード】

N 7 4 9 5 A

【作者名】

ハルシオン

【あらすじ】

ライラックを出て世界を旅する事にしたセルツに待ち受けている
運命とは…

第4話・謎

セルツはライラックを出てから何度か魔物と遭遇したが持ち前の剣の腕前で苦戦せずに目的の洞窟に辿り着いた。

「相変わらず不気味な洞窟だなあ…小さい頃何回か父さんに連れられてきたけど全く変わらないな」

セルツは気を引き締めて洞窟へと足を踏み入れた。

洞窟内はジメジメしておりコウモリが羽ばたく音が響きわたり不気味さが増す。洞窟は複雑に入り組んでなくほぼ一本道なため迷う事なく進んだ。

「もうすぐ出口だな」

暗い道の先に小さな光りがみえてきた。

セルツの歩く早さが速くなっていく。

『グオオオオオ!!』

突如不気味な鳴き声が洞窟に響いた。
セルツの足は止まる。

「な…なんだ!？」

セルツは剣を腰から抜き後ろを振り向く。

だがなにもいなかった。

いるのは天井にぶら下がっているコウモリだけだった。剣を腰に戻し出口へと向かった。

「うつ…眩しい」

暗い洞窟にいたため
外の明るさが目に痛かった。

「おっ！？アリーナの町も目の前じゃん！！」

セルツは目の前に見えるアリーナの町に向かって走っていった。

第5話・親子

アリーナの町

セルツはアリーナの町に無事ついた。

アリーナは港町だけあって風につて海の匂いが漂っている。
行商の人達も沢山いる。

セルツはまず港へと向かう事にした。

その途中ある店に目があった。

「占い…屋？」

そこにはいかにも怪しい占い屋が佇んでいた。

セルツの足は自然にその中へと向かって歩き始めた。

店の中には一人の老婆と一つの水晶があるだけだった。

「…なにかご用かね？」

老婆が話しかけてきた。

セルツはオドオドしながら

「い…いや特に…」

「…オヌシは不思議な雰囲気を持っておるな…特別に占ってあげよ

う。手をだしなされ」

セルツは老婆の言う通り右手を差し出した。

老婆はセルツの手を軽く握り、目をとじなにやらブツブツと言い始めた。

そして老婆は手を離しセルツの顔を見た。

「王都ミツガルへ向かうといい。そこにオヌシの探している物が見つかるじゃろう」

「ミツガル…？」

王都ミツガル。世界を統一するミツガル王がいる場所だ。

「わかった、行ってみるよ」

そう老婆に言いセルツは占い屋を出た。
その瞬間町中に緊急の鐘が鳴り響いた。

【カーン、カーン】

その音とともに町の女、子供は家の中へ逃げ込み男達は武器を手にとり外へと向かって走っていく。

「なにが起こったんだ!？」

セルツは好奇心で
町の男達と一緒に外へと向かった。

アリーナの町周辺

『グオオオオ!!』

外では魔物と男達が戦っていた。

「この鳴き声…まさか…」

セルツは隣にいた男に聞いた。

「あの魔物どの辺にいる魔物なんですか!？」

「旅人かい？ タイミング悪い時にきたね。 あいつはキラーベアって言ってあの洞窟に潜んでいる魔物なんだよ。 きつと誰かがあそこを通ったから出てきたんだな」

男の指さす方にはセルツが通ってきた洞窟があった。

「じゃあもしかして俺が通ったからあいつが…」

セルツは罪悪感を感じた。 自分があそこを通らなければあいつは洞窟から出てこなかった…
出てこなければ戦っている人達は傷つかずにすんだしみんな平和に暮らしていたに違いない…

セルツは男に

「みんなを町のなかへ！ こいつは俺がなんとかします」

と言った。

「君一人じゃどうにかなる相手じゃないよ!」

「大丈夫! 剣の腕前なら自信ありますから!!」

「…気をつけて…みんな! 町の中へ入れ!!」

男の合図と共に皆戦いを止め町へと戻った。

セルツは剣を構える。

セルツの前にいるのは

体長3メートルぐらいありそうなかい熊の姿をした魔物だ。

「いくぜ…」

セルツは地面を蹴り素早くキラベアの後ろへと回りこむ。
セルツが剣を振り上げた瞬間!!

【カチッ】

ボタンを押したような音と共に剣は二つに分かれてしまった。
突然の出来事にセルツはテンパる。

「えっ！？えっ！？壊れた！？」

そのスキを見てキラーベアがセルツ目掛けて鋭い爪を振り下ろしてきた。

セルツは間一髪で攻撃をさけ体制を立て直す。

「なんだよこの剣！二刀流でいいのかよ！！…あの糞ジジイ、ちゃんと説明しとけし」

ブツブツ文句を言いながら両手に持った剣を構える。だがセルツは二刀流が初めてだ。
果たして上手く使いこなせるのだろうか…

再びセルツは地面を蹴りキラーベアの後ろではなく上空へと飛んだ。キラーベアは一瞬の出来事にビックリしている様子だ。だがキラーベアはセルツが真上にいる事を野生の本能で察知しセルツを睨みつける。

「上等だ糞魔物！！」

『グオオオオオオ！』

キラーベアの唸り声と共にセルツの右から鋭い爪が襲いかかる。セルツは右の剣で受け止めた。

だが休む暇なく左から再び爪が襲いかかる。

だがギリギリの所で体をひねらせ肩に掠る程度で終わった。

「今度はこっちからいかせてもらっぜー！」

セルツは右手の剣を振り上げそのまま勢いよく振り下ろす。だがキラーベアの爪によって防御された。

「まだまだ！」

左手に持っていた剣でキラーベアの左腕めがけ勢いよくきりつけた。

キラーベアはその場に倒れこみもがいている。

セルツは無事地面に着地しキラーベアにゆっくり歩み寄る。

【ガサガサ】

突如横の茂みからなにかが飛び出してきた。

そのなにかは倒れ込んでいるキラーベアに寄り添う。よく見るとキラーベアの子供であった。
セルツは剣を元の形に戻し腰に納めた。

「お前…子供を守るために洞窟からでてきたのか…」

セルツは道具袋からスライムから奪った薬草を取り出しキラーベアの傷口にそつとあてた。

『グルウウウ…』

キラーベアがセルツを見つめる。その目はどこか悲しい目をしていた。

キラーベアは傷がある程度治ると子供を連れて洞窟へと戻っていった。

セルツは魔物の親子を見届け、再びアリーナの町へ入った。

第6話・王都ミツガルへ

アリーナの町

セルツは港へ向かった。

港には船が3隻だけあった。さっきの魔物騒動で船で逃げた人がいっぱいいたのだろう。

まず一番右端にとめてある船の方へいった。

「すみません、ミツガルに行きたいんですがあ…」

「ミツガル…！？んじゃあ300Gだよ」

…セルツは考えた。ミツガルまでに行く料金は場所にもよるが平均500G。確かに安い。だがいまの手持ちがピツタリ300G。もしかしたらほかの船の方が安いかもしれない。

「あつ、また来ますね」

と言い、その場を離れ次の真ん中の船に向かった。

そこにはゴツツイ体をした人が腕を組んで仁王立ちしていた。

こえゝ…

とか思いつつ声をかけた。

「す…すみません」

「ああゝ！？なんかようか！？」

「ミツガルに行きたいんですが…」

「1000Gだ」

「はいっ！？高っ！やっぱ止めます！」

セルツがその場を離れようとしたその瞬間！

【ガシッ！】

男がセルツの肩を鷲掴みしてきた。

「てめえ値段聞いという乗らないとはいい度胸してんなあ」

ええー！？いくらなんでもこんなボツタクリ丸だしの船なんて誰だつて乗りたくないよお！

と声に出そうとしたが殺されそうになりそうなたためセルツは言うのをやめた。

「いやー俺金ないしー」

「んだよ金無しかい」

と一言いいセルツを放り投げた。

「いてて…まあボツタクリにあわずに済んだんだからこんくらいいいつか！」

セルツは最後の左端の船へ向かった。

「あのお、ここはミッガルまでいくらですかあ？」

「ん？オラの船は漁船だあ。客船じゃねえど」

「あつ、すみません…」

どうやら客船ではなく漁船だったらしい。
セルツは最初の船の場所に戻った。

「すみませんミツガルまでお願いしまーす」

「アハハ、他の船変な人だったでしょ？」

「笑い事じゃないですよ。」

「まあ乗りな。出港は1時間後だからそれまでゆっくりしてくれ」

セルツは誘導された部屋に入った。

部屋の中には小さなテーブルと椅子が二個、本棚があるだけだった。
セルツは本棚から

「未開の地」

と言う今流行っている本を取り椅子に座った。

この本はある冒険家が未踏の地を冒険するという話だ。いまの所

5巻まででていていまセルツが手にしているのは3巻だ。

「この話しが全部本当だったらすごいなあ。たった一人で色々な所冒険してんだもん」

「未開の地」を読み初めてからどのくらい時間がたったのだろう。
ドアをノックする音が聞こえてきた。

セルツは本にシオリを挟みドアノブをゆっくり回した。

「あつ、こんにちわ。もうすぐ出港いたします」

船上員だった。

どうやら出港を教えにきたらしい。それだけを言つと隣の部屋に同じ事を言いに行ってしまった。

セルツは再び椅子に座り本を読み始めた。

【もうすぐ王都ミッガルへ到着致します。皆様、お荷物をまとめて部屋で待機しててください】

どうやらやっとミッガルへ着くみたいだ。道具袋をベルトにぶら下げ剣を腰につけた。

「ミッガルにいたらまず魔物を倒して金を稼がなきゃ…無一文だよ」

なんて事を口ずさんでいるとアナウンスがはいった。

【王都ミッガル到着。降りるお客様は甲板へお越しください】

セルツは忘れ物がないかをチェックし部屋を出た。

甲板

甲板には大勢の人がいた。セルツは列に並び船を降りた。

第7話・王都ミツガル

王都ミツガル

王都ミツガル。

世界でもっとも繁栄していると言われる都市。

ミツガルをまともに見物していたら5日はかかるぐらいの広さだ。
あまりにも広いため

ミツガルにはモノレールがある。

駅は4つあり、繁華街、工業地、産業地、ミツガル城がある。

そしてセルツは今繁華街の中心にいる。

「そついや占いのばあちゃんの言つてた探している物つてどこにあるだろ…つか物なんて探してたっけ？」

セルツはアリーナで会った占いの老婆に言われた言葉を思いだしていた。

セルツが今探しているのはクリスタルの守護者。

物ではなく人だ。

「ん…まったくわからん！！とりあえず外行つて金稼がなきゃ！
無一文じゃ宿に泊まれないもんな」

セルツは気合いをいれ外へと出た。

外に出て約1時間。

ある程度金がたまった。

さすがに1時間ぶつ通して戦闘していたら疲れがハンパなくなたまる。
セルツはフラフラしながらも宿へと向かった。

宿・アイアン

【カランカラン】

「いらっしやいませ」

ドアを開けると同時に店員が挨拶してきた。

「一晩泊まりたいんですが」

「お一人様ですね？では100G頂きます」

セルツは言われた通り100Gを店員に渡し部屋の鍵を受け取った。
部屋の番号は52号室。
3階にある部屋らしい。

セルツがその部屋へ行こうとしたその時

「あつ、お客様！」

店員が呼び止めてきた。

「なんですか？」

「今日午後8時より食堂でイベントがあるのでよかったですらお越しく
ださいませ」「あつ、わかりました」

セルツは一言返事するとすぐさま部屋へと直行した。このあと食堂
で一騒動ある事を今のセルツは知るよしもなかった。

第8話・大食い大会

アイアン・52号室

部屋へきたセルツはテーブルにある時計に目をやる。

「3時か…8時まで時間あるし軽く寝るか」

目覚ましを7時50分にセットし、ベットに横になり眠りについた。

【ギリリ、ギリリ】

目覚ましの音で目が覚めた。

「ふあゝ…ねむっ…」

セルツは眠い目をこすりながら起き上がり剣と道具袋を取り部屋を出た。

食堂

セルツは食堂へやってきた。食堂には宿泊者が大勢集まっており、賑わっている。セルツはある看板に目をやった。

大食い選手権！

優勝者には

明日開催される

ハンターチャンプ

の出場券を贈呈！

「ハンターチャンプ？」

セルツはハンターチャンプと言う言葉がわからないため隣の男に訪ねた。

「あの、ハンターチャンプってなんですか？」

「ハンターチャンプってのは年に一度開催されるイベントだよ。ミツガルに魔物が放たれるんだけどその魔物を倒してポイントを稼ぐんだ！それで優勝した人が願いが叶うと言われている「火のクリスタル」を拝められるんだ」

「火のクリスタル！？」

「ああ、そうさ」

セルツは気付いた。

占いの老婆が言っていた探している物とはクリスタルの事だった。セルツは迷う事なく大食いの受け付けをした。

【さあさあさあ！やってまいりました大食い選手権！果たして今回はどんな大物が誕生するのか！！】

高いテンションのマイクパフォーマンスが宿中に響き渡る。

【今回参加者総勢15名！では初戦を開始いたします！最初はあゝ…】

厨房の奥から料理が運ばれてきた。

【最初はスライムの塩漬けだあゝ！！！！】

「うつ…」

セルツは吐き気がしてきた。まさか魔物の料理が出てくるなんて思ってもいなかった。

しかも見た目がグロい…

人間の食べれる物とはとても思えない程だ。

【それではレディー…ファイツ！！】

問答無用で開始されてしまった。
みんな一斉に食べ始めたが

「おえっ」

「うつ…」

皆目に涙を浮かべながらも無理矢理口へはこんでいる。セルツも負けてられんと思い料理を口へ運んだ。

「……………もうやだ…」

一口でギブアップしそうな程マズイ料理にセルツは早速弱音を吐く。だがそんなセルツを横に黙々と食べている女性の姿があった。

髪は茶色のセミロング。服からして僧侶系と見える。しかも顔は可愛い方だ。

セルツはその女性に見とれる。

「はっ！…見とれている場合じゃないし！無理矢理でも食わなきゃ！」

そして吐きそうになりながらもセルツは一皿目を完食し二皿目に突入。

二皿目もなんとか完食。三皿目になると味覚が麻痺してきておりほとんど味を感じなくなってきた。

そうだったら勝負はもらったも同然。セルツは普段はあまり食べないがいざとなると凄まじい量を食べる。そして制限時間がすぎた。

【終っ了っ！皆さん手を止めてください。では食べ終えたお皿の数を数えたいと思います】

店員数名でできて皿の数を数えている。

【集計が終わりましたあ！上位三名が準決勝に参加できます。では第三位：セルツ・アルフォード選手！】

どうやらセルツはギリギリの三位だったようだ。

【第二位：エルブン・スコット選手！！そして第一位が……なんとレナ・ティレット選手！！女性です！これは準決勝が見物ですね】

「あの人レナって言うんだ。」

そんな事を呟き準決勝を行う椅子へと腰をかけた。

【ではでは、準決勝の料理を運んで来てくださーい！！】

次なる料理が三人の前に運ばれてきた。
鍋料理だ。しかも見た目、匂いなども良い。
セルツはホッと胸を撫で下ろす。

今回まともな料理みたいだな…てっきりまた変な料理かと思ったし…

なんて事を思いつつ箸に手をつける。

【それでは準決勝！レディー…ファイツ！】

セルツは速攻で鍋から皿に料理を移し少し冷ましてから食べた。

「んっ！？うまい！」

予想外の味にビックリしながらも料理を口に運ぶ。
そして終了時間がやってきた。

集計の結果一位がセルツ。二位がレナとなりセルツとレナが決勝に
勝ち進んだ。とここでアナウンサーからの衝撃的な事実がつけられ
た。

なんとさつき食べていた鍋料理。実はマウスハンターと言う魔物の
肉を使った料理らしい。

セルツはそれを知った瞬間軽く嘔吐してしまった。
だがレナは平然としていた。

なんだあの人…こんな料理食べ慣れているのか？

そんな疑問を持ちつつも決勝が開始される場所へと移動した。

【ついに決勝！今回の料理は…これだあゝ！！】

厨房から出てきたのは小さなシュウマイだった。

セルツはまた嫌な予感がしたためアナウンサーに質問をした。

「あの…また魔物を使った料理…？」

【そうです！今回はウルフの肉をたくさん使ったシュウマイですよ！！】

セルツは溜め息をつき

肩の力を無くした。

もはやここまでくるとどんな肉でもいいやと思う。

【それでは決勝！！レディー…ファイツ！！！！】

合図と共に二人は一斉に食べ始めた。
一皿に小さなシュウマイ6個のっただけなため簡単に一皿を完食する。

そして30皿目。

レナの手動きが止まる。セルツはチャンスと思い食べるスピードを早くする。そしてレナの手動きが止まったまま勝負は終了した。

もちろん優勝はセルツだ。優勝商品のハンターチャンプの参加チケットを貰い部屋へ戻ろうとした時だった。

「ちょっと待ってください」

誰かが声をかけてきた。

セルツは後ろを振り返ると一人の女性がたっていた。

「えっと…レナさん…?」

「はい。あなたにお願いがあります!そのチケット私に譲ってください!」

「はいっ!?いや、無理ですよ!俺も必要だし…」

「私も必要なんです!世界の運命がかかっているんです!!」

「世界の運命？」

セルツはもしかしてと思いレナに聞いた。

「クリスタルの…守護者？」

「はい！もしかしてあなたも…？」

「うん！火のクリスタルのね！」

なんと幸運にもクリスタルの守護者と遭遇。

だが火のクリスタルの場所へ行けるためのハンターキャンプに参加できるのは一人のみ。

はたしてセルツとレナはどうするつもりなのだろうか…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7495a/>

Crystal Story 中編

2011年1月15日14時51分発行